郷土ちがさき

第151号
発　行　令和3年5月1日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会　長　平野文明
編集責任　平野文明

茅ヶ崎の海　よもやま話（その一）　名取龍彦……2
中島日枝神社の山王銘扁額他　加藤幹雄……8
私のふるさと三　新潟県旧高柳村栃ヶ原　小川正恭……14
風（自由投稿欄）　今井文夫・平野文明・羽切信夫……16
綿引進さんのご逝去を悼む　杉山 全・羽切信夫……21
これからの行事予定他……22

包み紙

プラスチックの白い買い物袋をほとんど見かけなくなりました。地球のためにはそれはそれで良いことだと思います。

私の子ども時代の包み紙はまず新聞紙でした。野菜を買うとき、魚を買うとき、そのほか新聞紙は万能包み紙でした。毎日持っていく弁当箱はアルミ製でしたが、どういう訳か遠足の日は梅干し入りでソフトボール大の焼きおにぎり。新聞紙でくるみ風呂敷に包んで持たされました。腰に結わえて行きました。

郷里熊本で、ある日父とバスに乗って町まで出かけました。帰りに買った一匹の塩鯖を魚屋は藁づとに包んでくれました。ひとつかみの稲わらの根元を数本の藁でしばって折り返し、頭を下に魚を入れ、上にきた稲の穂を撚り合わせ、下げ緒にしてくれました。私はそれをぶら下げて満員バスで父と帰りました。

今、茅ヶ崎海岸のサイクリングロードで、その脇まで崖になっている所があります。荒れ海の波が寄せると砂が流出するのです。砂の供給が止まったためなのか、温暖化で海水面が上昇しているためなのか。茅ヶ崎だけのことではないようです。

地球を、優しく包む包み紙というものがあるといいのですが。

茅ヶ崎郷土会々長　平野文明

茅ヶ崎の海　よもやま話　（その一）

名取龍彦

今号から、歴史ある『郷土ちがさき』誌上に、拙稿を連載していただけることになりました。大きな喜びと共に、会員の皆さまの大切な紙面であることを考えると身が引きしまる思いです。

長年私が興味を抱き続けているテーマが二つあります。ひとつは蚕糸（さんし）業（蚕種業・養蚕業・製糸業）です。純水館茅ヶ崎製糸所と小山房全（ふさもち）さんに関する講演の機会を、昨年末に郷土会で設けてくださいました。あと二回お話させていただく予定です。

もうひとつのテーマが茅ヶ崎の海です。二つのテーマは、私の生まれ故郷の長野県（信州）が関係しています。長野県は、「蚕糸王国」と言われた時代があり、特に生糸を繰る製糸業が昭和の前半まで大変盛んでした。純水館の本拠地は長野県の小諸（こもろ）です。小山房全さんは信州人です。また、長野県は皆さんご存じのとおり「海なし県」です。私は、海に対して、憧れとはちょっと違いますが、特別な思いを持っています。小学校六年生の修学旅行で、初めて海を見ました。私と同様に、小学校六年生で初めて海を見た級友が大勢いました。その海が江の島の海です。大喜びで海水を舐めてみました。「しょっぱい！」。「海は広いな、大きいな！」。幼少時の記憶には、おとなになった時よりも、自然との出会いのひとコマひとコマに感動があり、鮮烈な印象が残っている気がします。ノスタルジーでしょう。修学旅行の宿題は、持参したマヨネーズの容器で海水を持ち帰り、家庭で塩を煮だすことでした。

それから十数年後、江の島に近い茅ヶ崎で職を得て感慨深いものがありました。その年（昭和五十七年）の夏に、茅ヶ崎の海で初めて海水浴をしました。しかし、当時の海は、海面にビニール袋が漂い、「自分の中にあった海」とは隔たりがあり、落

2019 年８月のマイクロプラスチック調査。
茅ヶ崎市民が参加しています。
遠くに江の島が見えます。

マイクロプラスチックの抽出作業

胆が大きかったです。現在は、あの頃に比べると、目に見える大きなゴミは減り、海岸は随分きれいになりました。でも、実はマイクロプラスチックによる汚染が確実に進行しています。大学の先生のご指導で、最近マイクロプラスチックの調査を茅ヶ崎海岸で行なっています。一メートル四方の範囲にあるマイクロプラスチックを抽出するのですが、その数の多さに驚きます。この一メートル四方の何倍の広さが、日本の海岸にはあるのだろうかと考えると恐ろしくなります。海底にはもっとたくさんのマイクロプラスチックがあると聞きました。

茅ヶ崎に就職してから三十数年、二年前に定年退職をしました。最後の四年間の勤務地が南湖地区でした。南湖にお住いの方々は勿論ですが、海や漁業に関わる多くの方々と知り合いになりました。海で様々な体験をし、色々なことを学びました。

前置きが長くなりましたが、私と海の関係をお話しました。「茅ヶ崎の海　よもやま話」では、これまでに調査・研究したことがらと漁師さんや海の関係者にお聞きしたことを書いていく予定です。併せて、漁港は南湖にありますので、海に近い南湖地区の話題も提供します。

私は、以前から茅ヶ崎のシンボルである姥島（烏帽子岩）に興味を持っており、資料集めや、姥島現地での地質や生物、歴史的遺物の調査を続けています。現在は、「烏帽子岩」の名称が一般的に使われていますが、かつては、様々な名前で呼ばれていました。ジンジ・バンバ、オネバアサン、乳母島、祖母島、矢根島、姥島、姥ヶ島、ウバガ石、白石之岩、大石、元根、筆岩・・・。現在の国土地理院の地図では、「姥島（烏帽子岩）」と表記されています。「烏帽子岩」の呼称については、平野会長さんが『郷土ちがさき』一四八・一四九合併号で紹介しています。その中で、「烏帽子岩」の名称が最初に文献に登場するのは、嘉永二（一八四九）年の『北斎漫画』だと知りました。それまでは、仏人エミール・ギメが執筆した明治九年の『1876 ボンジュールかながわ』にある「Ｅｂｏｏｓｈｉ」の記述が初出だと認識していましたので、新たに知ることができました。

『郷土ちがさき』誌上にある『北斎漫画』で画かれた「相州烏帽子岩」は、だいぶ海水面に浸かっています。関東大震災で姥島が隆起する前の姿だと思われます。隆起に関連する『横浜貿易新報』の記事を紹介します。拙稿では、今後『横浜貿易新報』の記事を多数引用しますので、『横浜貿易新報』について先に説明をします。『神奈川新聞』の前身が『横浜貿易新報』であり、明治二十三（一八九〇）年二月一日創刊の『横浜貿易新聞（ママ）』まで遡ることができます。シルクペーパーとも呼ばれた『横浜貿易新報』は、「商人の自主・自立」「商権の拡大」を創刊の趣旨としています。外国商人が特権を持ち、日本の商人が弱い立場にある不平等条約時代の創刊です。当時の主要輸出品は生糸で、そのほとんどを横浜港から輸出していますから、生糸相場や海外の商況など蚕糸業に関して様々な記事を取り上げています。読者は神奈川だけでなく、関東一円、長野、福島など養蚕地帯にも広がり、重要な情報源になりました。

『横浜貿易新報』の縮刷版（写真版）を、寒川文書館（寒川図書館四階）で閲覧できます。明治二十三年六月二十九日の『横浜貿易新聞』から昭和四十九年十二月三十一日の『神奈川新聞』まで所蔵されており、開架式で手軽に閲覧できます（欠

落年、月、日もある）。県内でも縮刷版（写真版）が所蔵されている施設は極少数であり、隣町の寒川文書館に所蔵されていることは案外知られていません。歴史資料を手軽に探すことができるのですが、利用者が多くないようでとても残念です。

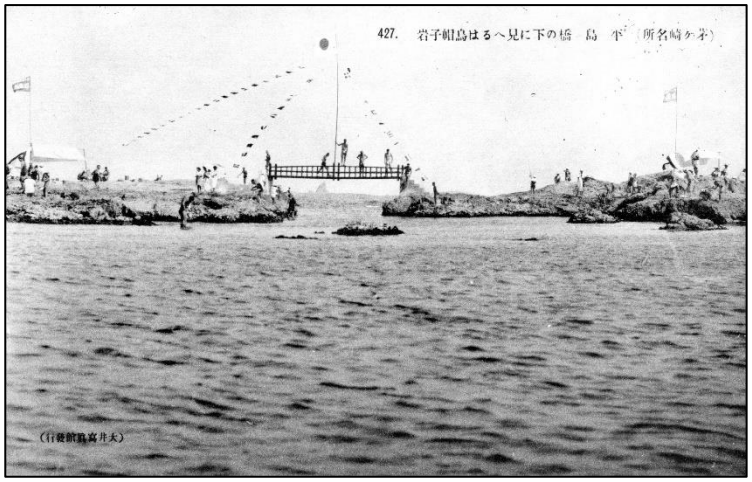
元々は、純水館茅ヶ崎製糸所の関連記事を探す目的で閲覧し始めたのですが、茅ヶ崎の海に関する記事も探しました。『横浜貿易新報』の茅ヶ崎関係の新聞記事目録は『茅ヶ崎市史』の現代五・六巻にありますが、戦後の記事のみの目録です。戦前の新聞記事を探すには、頁を一枚一枚めくりながら探すしかありません。退職後に時間が確保できた私は、楽しみながら、地道に記事の捜索作業を行いました。但し、記事の「捜索範囲」は、大正六年から昭和十年までに限られています。理由は純水館茅ヶ崎製糸所の創業が大正六年で、館主の小山房全さんが亡くなったのが昭和十年だからです。

では、関東大震災の時の姥島に関する記事を紹介します。

〈記事その一〉　大正十三年六月二十五日

見出し：**県下十二勝の一　茅ヶ崎海水浴場　此処も地震で隆起し一層好適地となる**

本文：**「曾ては本社主催県下避暑十二勝地海水浴場として当選した茅ヶ崎海岸は震災後忘れられて居たが夏を迎ふる此頃諸準備整ひ不日海水浴場も建設される、地震により県下海岸は一般隆起の状態なるがこゝも海浜十五間余も突出し姥島平島等と共に海底一間内外の隆起したので海上は以前に増して安全となつて居る公設更衣所は昨年より規模は小なるも海岸より約二百間を離れた平島礁上にも休憩場を設け渡船を用意せば同所磯を以て囲まれた水清く波穏やかなる一水泳場も利用できることゝ有志計画もある（後略）」**



「平島橋の下に見へるは烏帽子岩」　大井写真館撮影　筆者蔵

「姥島平島等と共に海底一間内外の隆起」とあります。一間（約一八〇センチ）とは相当な隆起です。「平島礁上にも休憩場を設け渡船を用意」する有志計画もあると書かれていますので、大正十三年には、平島に人工設備がなく、渡船もなかったと思われます（公設更衣所がどこにあったのか解釈が難しい）。記事中では、「烏帽子岩」ではなく「姥島」と表記しています。大正十三年頃は「姥島」の呼び名が一般的だったこともわかります。

先日、姥島の絵葉書を入手しました。「（茅ヶ崎名所）平島橋の下に見へるは烏帽子岩」との説明が付されています。茅ヶ崎漁港の堤防建設により平島が陸とつながる前の写真で、島

（岩）の間に姥島が見える絶妙なアングルです。堤防の建設が始まったのは昭和二十六年です。昭和九年生まれ（八六歳）で、南湖在住の現役の漁師さんに、早速この絵葉書を見ていただきました。写真中央の橋から海に飛び込んだことがあるそうです。また、この平島へ泳いで行く途中でおぼれそうになったこともあると聞きました。堤防ができる前は、平島の手前も相当深かったようです。小さいときに助けられた経験がありますが、漁師になってからは、海水浴シーズンになると自分たちが順番で監視員をやっていたそうです。今はライフセーバーの皆さんが海岸で監視していますが、かつては平島周辺に船を停泊させて、船上から漁師さんたちが監視員を務めていたのです。その船を長野県出身の飲んべえの警察官がどんな経緯か不明ですが、譲り受けて「しなの丸」と命名しました。その警察官は、私と同じで、海に特別の思いを持っていた信州人だと想像します。「しなの丸」は小型の伝馬船なので、漁師さんたちから漕ぎ方を教わり、釣りなどの遊びに使っていたそうです。警察官は、後に長野県に帰ったらしいですが、「しなの丸」は、茅ヶ崎漁港の船揚場に現在もそのまま残っています。古くなって使われていません。探してみるのも一興かもしれません。

絵葉書については、「島（岩）が海面から高く出すぎているな」との感想もありました。撮影年は昭和十年頃との推定です。また、たくさんの人（洋服を着た女性も数人）が上陸しているので、この頃は渡船（伝馬船）で渡れたのだろうとのことでした。渡船が動力船になったのは、昭和三十九、四十年頃だそうです。

海から離れますが、『横浜貿易新報』で関東大震災に関連した面白い記事を見つけました。

〈記事その二〉　大正十三年十二月二十三日

見出し：**茅ヶ崎の鉱泉浴場を建てゝ入浴せしむ**

本文：**「茅ヶ崎町茅ヶ崎本村入澤仙蔵方の非常用水が昨年の震災にて水質に変化を生じたる由は既報の如きが続いて県衛生課の分析成績を発表したが同家は土地に於ける名□家にて該鉱泉を独占するに忍びず近隣の希望者に分与して居たが尚広く諸人の入浴に便せんと過般□湯殿新築中の所落成廿一日午後一時より茅ヶ崎町長代理沼上助役本村関係者百名新聞記者等を招待して落成祝賀会を開き園遊会余興等に来会者に満足を与へたが該温泉は同家に由緒深き稲荷社の傍らにあるより稲荷湯と命名稲荷寿司を名物として来る正月より一般客を迎ふる由右の湯は少しく黒味を帯び非常に温まる事は同地の人の證明して居る所である」**（□は文字がつぶれて判読が不明な箇所です）

2020 年６月１日　撮影

本村入澤家の非常用水の水質が関東大震災で変化し、稲荷社の傍らにあることから「稲荷湯」と命名して新築、開業したという記事です。「稲荷寿司」を名物としたのも面白いです。その後の「稲荷湯」はどうなったのでしょうか。ご存知の方は教えてください。

南湖の「恵比寿湯」は、残念ながら昨年突然廃業してしまいました。現在は宅地になっています。「恵比寿湯」には、いつか浸かりたいと思っていましたが、叶いませんでした。「いつかは」と思っているのはダメです。失われていくものは、保存や体験、見学、記録をきちんとしておかなければいけないと改めて感じています。

史蹟　旧相模川橋柱　　筆者蔵

「恵比寿湯」から程近いところに、後述する「八大龍王社」があり、「人参湯」がありました。平塚らいてうさんが、人参湯の離れに住んでいました。パートナーで画家である奥村博史さんが南湖院で結核治療していた関係です。自宅療養に変わった奥村さんの看病、長女曙生（あけみ）さんの育児、執筆の生活をしていました。南湖在住だった三橋卯之助さん（平成二十五年死去）が、たくさんの絵を描き残しています。その中に「らいてうの住んでいた家」「らいてうの住んだ家」と題名が付けられた二枚の絵があります。「らいてうの住んだ家」には、家屋の絵の他に、「増田牛乳店」「人参湯」「大正末」の文字と四畳半三間六畳一間の間取り図が描かれています。絵は茅ヶ崎市に寄贈されていますが、許可がないため掲載はできません。人参湯は、米軍のバーになったと聞きました。戦後、進駐軍（米軍）が南湖院をキャンプチガサキとして接収した時に使われたものと思います。

関東大震災で隆起したもので有名なのは、「烏帽子岩」と旧相模川橋脚です。当時の様子がわかる絵葉書を紹介します。現在は保存のため公園になっています。

茅ヶ崎の海の話題に戻します。写真①は八大龍王の石碑です。石碑の裏に大正五年建立の銘があります。現在は茅ヶ崎漁港の「ちがさき丸」店舗敷地内にありますが、元々は国道一三四号線沿いにあった二基の八大龍王の石碑の一基（写真②左）

写真①　2018年２月撮影

写真②　撮影日不明

を、平成二十四年に遷（うつ）したものです。写真②の場所は、交通機動隊前の交差点で、現在はビルが建っています。写真②の右の一基は南湖の八大龍王（龍宮）社（写真③の右）に遷しています。八大龍王は、海、川や湖にすみ、雨と水をつかさどり、漁村では海上の守護神として信仰されてきた神様です。豊漁の時には、漁師さんが獲れた魚を真っ先に八大龍王に供える習慣がありました。これを「カケオー（掛け魚）」と呼んでいました。茅ヶ崎の海岸付近では、六か所程に八大龍王の石碑や石祠があります。

現在茅ヶ崎漁港の駐車場の整備が進んでいます。今回、「ちがさき丸」の敷地内から、漁港の整備地内へ八大龍王の石碑が遷ることになりました。現在撤去中の「茅ヶ崎漁港整備の碑」の近くに設置するようです。「ちがさき丸」の敷地内へは自由に立ち入ることが出来ませんでしたので、海が見える広い場所へ遷ることは大変喜ばしいことです。八大龍王が、再び姥島を望める場所から漁師さんたちの安全と大漁を見守ることになります。末永く石碑が保存されることを願っています。

写真③　2018 年２月撮影

先程、失われていく歴史的遺産のことを書きましたが、写真④は失われてしまった石碑です。南湖には昭和三十三年から事業を始めた（株）茅ヶ崎丸大魚市場がありましたが、一昨年廃業しました。敷地内南西側には、写真④の石碑がありました。『茅ケ崎の記念碑』一三九頁に報告されています。しかし、廃業に伴い撤去され、廃棄されたと関係者から聞きました。残念です。石碑には「御祖まつるあとはなけれども　魚せる場所が栄えて霊を弔う　孫文」とありました。碑のある場所が、鈴木家の元墓域であったために書かれた碑文です。鈴木家は「天孫（てんまご）」と呼ばれた元網元で、現在も浜降祭の御旅所神主を務めています。鈴木家の思いが刻まれた石碑でした。

写真④　魚市場の石碑
2018 年５月撮影

次回以降も、時より話題が脇道に逸れながら回を重ねることになると思います。郷土会の皆さんへの話題提供の場だと考えていますが、会員の皆さんにとっては既知のことがらも多いと思います。ご容赦ください。今回のよもやま話についても、何か関連するお話がある方は是非教えていただきたいです。よろしくお願いいたします。

〈参考文献〉
『横浜貿易新報』
『姥島　烏帽子岩』二〇一八年　茅ヶ崎市立西浜中学校
『郷土ちがさき』二〇二〇年　一四八・一四九合併号
『４万号の遺伝子　神奈川新聞社の１２０年』二〇一〇年
神奈川新聞社
『茅ヶ崎の記念碑』塩原富男　一九九一年　茅ヶ崎市文化資料館

〈掲載写真〉
写真②　平野文明氏撮影
写真④　加藤幹雄氏撮影
以外は筆者の撮影です。

資料紹介

中島　日枝神社の山王銘扁額　及び日枝神社銘扁額

加藤幹雄
（ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会）

一　はじめに

中島の鎮守　日枝神社は『新編相模国風土記稿』（天保十二年：一八四一）中島村の項に「山王社　村の鎮守なり、大住郡馬入村蓮光寺持」と記述され、江戸時代は山王社、明治時代に日枝神社となった神社である。地元で聞き取り調査をしたとき、日枝神社はかつて相模川の河川敷の中（現　ウメダモータースのジャンクヤード）に蓮光寺と並んでいたという伝承があった。しかし『東海道分間延絵図』文化三年：一八〇六）をみると、既に現在の位置に描かれている。日枝神社のすぐ近くには中島村の領主山岡家の陣屋があったと伝えられおり、日枝神社はその鬼門の守護神として、山岡家が祭ったといわれている。ここに紹介する日枝神社の扁額は大変古いもので、中島真平氏は『郷土中島を語る』（一二六頁）で、山口金次氏は『茅ケ崎歴史見てある記』（八〇頁）で取り上げている。しかし、両書共に、写真やスケッチはな

く、記述のみのため、是非実物を拝見し記録に残したいと願っていた。

令和二年（二〇二〇）十一月二十一日、日枝神社氏子総代の数田久雄さんと宮係の鈴木秀明さんの立ち会いのもと、そのご好意により、本殿に掲げられている扁額を、「茅ヶ崎郷土会」（当日参加の会員は尾高忠昭、羽切信夫、平野文明、山本俊雄）と「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会」（当日参加は加藤幹雄、平松和弘）とで調査する機会を得たのでここにその概要を報告したい。

「扁額」を『広辞苑』で調べて見ると「室内や門戸に掲げる横に長い額」とある。「扁」を『新字源』で確認すると「戸と冊から成り、意味は札（ふだ）、門戸にかけるふだ」とある。扁＋額になると長くなるのも面白い。

「扁額の用途は、扁額が懸けられている建物の名称や、その建物を含む施設全体の名称を表示するためのものである。日本の扁額は寺院の額字にはじまり、朝廷から正式に認められた寺院にたいして勅額があたえられた。そうした寺院は「定額寺（じょうがくじ）」と呼ばれ、続日本紀天平勝宝元年（七四九）の条に見られる」（奈良文化財研究所のサイトに掲載されている同研究所紀要二〇〇八中『扁額の意匠と構造―平城宮第一次大極殿正殿扁額の復元考察―』）と説明されている。

二　山王銘扁額

扁額（神額ともいう）は高さ約七〇センチ、幅約四六センチ、厚さ八センチ。

長い年月が経っているにもかかわらず、おもて面の額面（文末の注記を参照のこと）にある彫刻文字およびその塗装も非常に良い状態で残っている。背面には塗装はなく、彫刻文字のみではあるが文字もはっきりと読むことができ、非常に良い状態を保って

山王銘扁額（おもて面）

山王銘扁額（背面）

いる。永い間、大切に扱われて来たことが伺われる。

おもて面の額面の部分に「山王」と刻字されており、字体は不明であるが「山」は山の字に下に一を加える異体字で、彫刻された文字に黒色塗装し、その上に金色の塗装（金箔か？）がされ、その金色は今でも文字の縁に良く残っている。額面の全面は黒色塗装（うるし塗か？）されており、山王の文字を引き立たせている。山王の文字の大きさは縦四一センチ×横二二センチである。額縁（がくぶち）の塗装の有無については判断出来なかった。

背面は無塗装でおもて面とは別材でつくられており、角釘で額縁に接合されている。釘は奉納当初のものか、後世に打たれたものかは判別できなかった。

背面には縦四行に分けて刻字されている。

右から順に

① 奉掛相州高座郡濵郷中嶋村山王大権現御寶前

② 為子孫繁昌頓生菩提

③ 時之領主山岡氏景忠

④ 筆者大角圓順

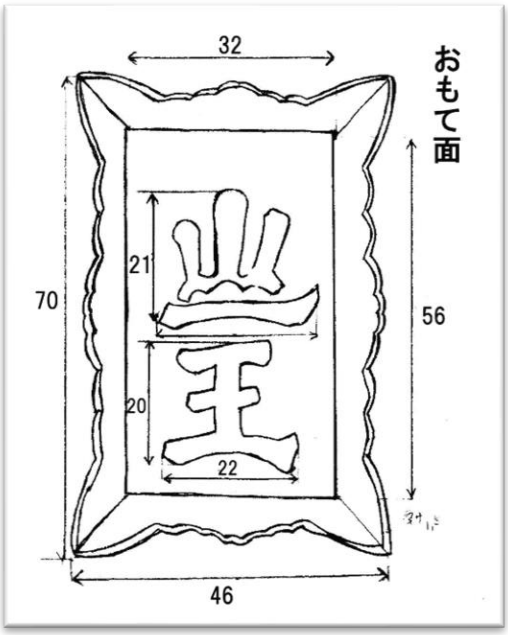
これによると、

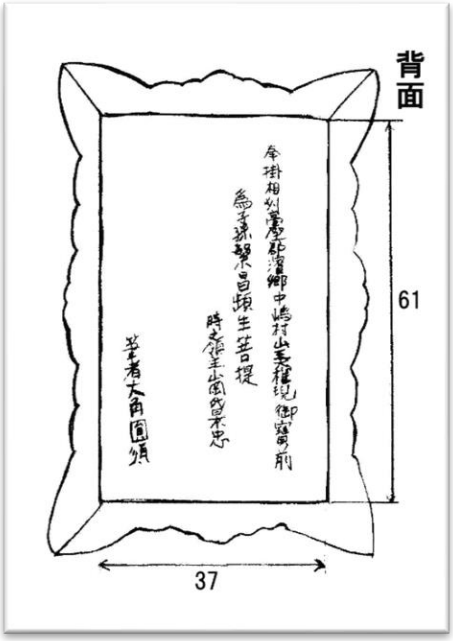
①一行目「奉掛（奉納）相州高座郡濵郷（浜之郷）中嶋村山王大権現御寶前」（括弧書きは筆者注記、以下同じ）

②二行目「為子孫繁昌（繁盛）頓生菩提（とんしょうぼだい　追善回向の功徳によって死者が成仏すること―広辞苑）」

③三行目「時之領主山岡氏景忠」

山岡景忠が中島村の領主であったのは『寛政重修諸家譜』第千百四十五、山岡家の部分及び『山岡家々譜』（文末の注記参照）によると、遺跡を継いだ寛文元年（一六六一）十月から、亡くなった元禄十一年（一六九八）までの三十八年間であり、この間に奉納されたものと考えられる。





④四行目「筆者大角圓順」

この大角園順とは誰であるか不明だが、私は大角を「おおとがり」と読み、山岡景忠の知行所があった下総国香取郡大根村・長山村のすぐ近くにあった、字（あざ）名、大角（おおとがり　現香取市大角）ではないかと推測している。また園順は大角に住んだ、山岡家と関係のある僧侶と考えたい。コロナの蔓延が落ち着いたら現地へ行って調査したと思っている。

裏面に書かれている以上のことを要約すると、「山岡景忠が中島村の領主だった時に、中嶋村の山王大権現に子孫繁栄と死者成仏を願い、扁額を奉納した。この扁額を書いた筆者は大角に住む僧圓順であった」となる。

三　山岡家と山岡景忠

山岡家

「山岡氏は万葉歌人大伴家持の子孫と称する近江国の土豪で、もとは織田信長に仕え、山岡景定のとき徳川家康に属し、景長（三代目）は天正十九年（一五九一）五月三日に懐島之郷（浜之郷村二二〇石・中島村八〇石の計三〇〇石）を宛行われた。山岡氏は後に加増や分知（ぶんち：知行の一部を親族に分与すること、分地ともいう）を経て、相模国以下常陸国（茨城県）・下総国（千葉県）・大和国（奈良県）等で七〇〇石を知行した。本貫は浜之郷村で、村の曹洞宗龍前院は景長が中興した累代の菩提寺である。天正十九年五月三日付けの宛行状他、所領関係文書が今も山岡家に伝存している。」（茅ヶ崎市史ブックレット⑮『ちがさきの村とお殿さま』二八～三一頁）

裏面にある領主山岡景忠の名前

山岡景忠

日枝神社に残る扁額を奉献した山岡景忠は『寛政重修諸家譜第千百四十五』及び『山岡家々譜』によると初代山岡景定から七代目にあたり、寛永十五年（一六三八）相州生まれ。正保三年（一六四六）はじめて大猶院殿（徳川家光）に御目見得した。承応三年（一六五四）大番（おおばん：旗本の役職）に就き、寛文元年（一六六一）遺跡を継ぎ、七〇〇石の内、五〇〇石を知行し、二〇〇石を弟景元に分け与えた。天和元年（一六八一）三崎の奉行となる。元禄七年（一六九四）御先鉄砲組頭になり、元禄十年（一六九七）常陸国茨城郡のうちにおいて采地（知行地）を拝領（二〇〇石）。元禄十一年（一六九八）死亡。六一歳、法名は玄正とある。

また、龍前院のホームページには「山岡氏の五代目（ママ）、景忠は早死にした弟景継（ママ）の供養の為に龍前院の梵鐘を改鋳した。元禄七年（一六九四）の銘があり、第二次世界対戦中の供出も免れて、現在茅ヶ崎市内最古の梵鐘として市重要文化財となっている。」とある。

『山岡家々譜』によると、景忠は龍前院へ「達磨の木像」や「釈迦涅槃木像図」、「采メ（うねめ）誕生図」などを寄進したことが記されている。しかし、中島村山王大権現へ寄進した「山王」銘扁額のことは残念ながら記載されていない。

これらの資料から見ると、山岡景忠は中島村にあった陣屋で生まれ、領主として神仏を篤く信仰し、社寺の復興に注力したことが伺い知れる。これはまた景忠の領地経営の一つであったのかも知れない。

山岡家はその後、明治維新まで中島村と浜之郷村の領主を続け

た。現在でもご子孫が東京目黒にご健在である。

今回、令和二年から約三二〇年前の立派な扁額を間近で拝見し、茅ヶ崎の奥深さを感じると共に、この扁額を中島の宝物として後世に永くの遺して欲しいと改めて思った。

四　「日枝神社」銘　扁額

山岡家寄進の山王銘扁額とは別に日枝神社銘扁額（紀年銘なし）も奉納されており、今回一緒に調査させて頂いたので、ここに併せて概略報告をさせて頂く。

日枝神社銘扁額は高さ五六・五センチ、幅約三五・五センチ、厚さ六センチ。

おもて面の刻字・背面の文字もはっきりと読め、良い状態を保っている。おもて面の額面に浮き彫りで「日枝神社」と彫刻されて、文字は黒色塗装である。額面は無塗装で生地のままである。額縁も無塗装である。

背面は無塗装で額面とは別材つくられており、角釘で額縁に接合されている。材質はおもて面および額縁はケヤキ、背面はスギ。

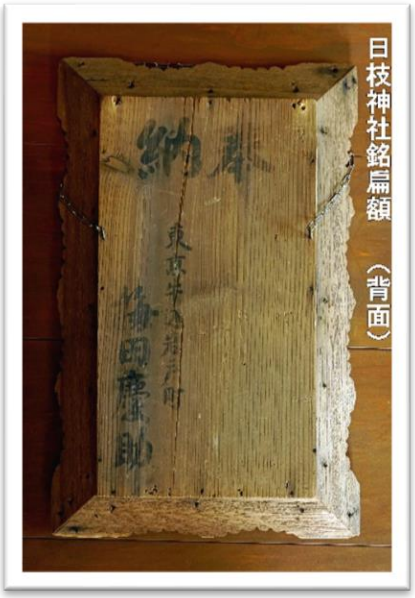
背面の文字は墨書文字のみである。文字は上段に右から横書きで、

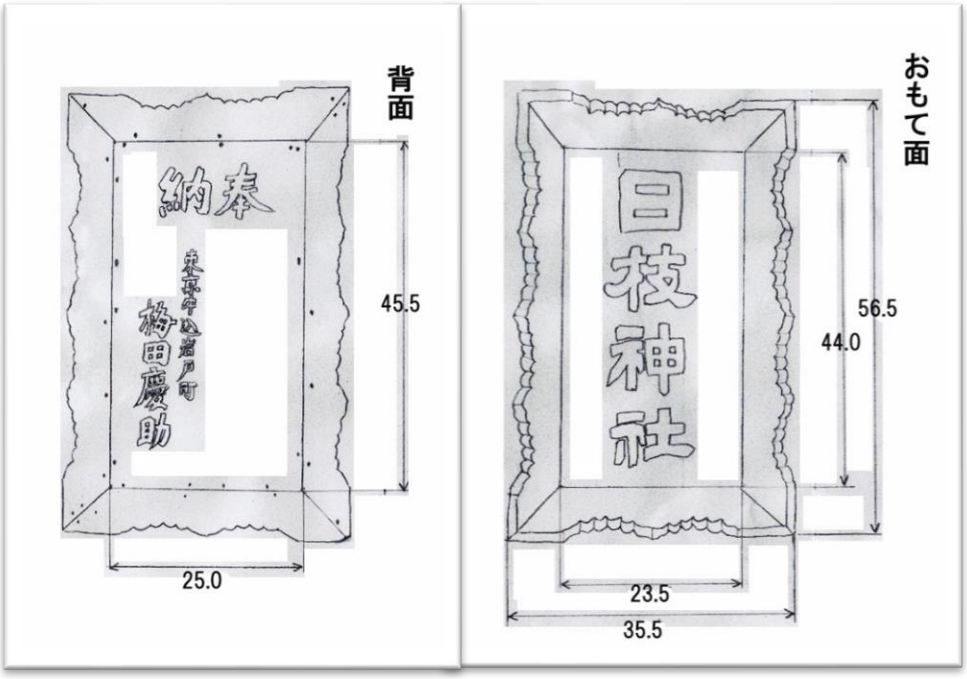
①奉／納（その下に縦書きで）

②　東京牛込岩戸町

③　梅田慶助

とある。





この扁額が奉納された年代は特定出来ていないが、神社名が「日枝神社」であること、住居表示が東京牛込であることから考えて、作成されたのは明治以降と考えられる。日枝神社は関東大震災で全壊し、大正十五年（一九二六）に再建されており（調査当日鈴木総代から頂いた神社の説明書きによる。現社殿は平成十二年完成）、この時期に奉納された可能性もある。奉納者「梅田慶助」についても不明であるが、東京牛込は山岡家と関係ある寺が二寺（西光院・保善寺）『山岡家々譜』に記されており、山岡家一族の江戸時代初期の屋敷があったことも考えられ、その関係者の可能性もある。

最後に、今回、扁額の調査にご協力頂きました数田総代、鈴木宮係、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

注記　「額面（がくめん）」と「額縁（がくぶち）」

ここに掲載する報告では、額面は「山王」の文字のある平面の板の部分を、額縁は額面の四周の装飾のある立ち上がっている部分を称することとする。

注記　『山岡家々譜』について

山岡家所蔵文書中にある山岡家の系譜。表題が付いていないので、仮に『山岡家々譜』と呼ぶことにする。茅ヶ崎市が管理する文書資料にマイクロフイルム化して保存されている。筆者は原本を保存する山岡家の承諾を得てこれを拝見した。この家譜は山岡景就（一五〇〇年代頃）からの家系が書かれており、編集年は記載されていない。書かれている年号で最新のものは元禄十五年（一七〇二）なのでこの時期までにまとめられたと考えられる。内容は『寛政重修諸家譜』の記載とかなり重複するが異なっている部分も多くあり、山岡家を調べる上で大変参考になった。

〈参考文献〉

『東海道分間延絵図』東海道分間延絵図全二十四巻之内　第二巻絵図篇（中島村の付近）　東京美術一九七八年刊
中島真平『郷土中島を語る』一九八六年　自家版
山口金次『茅ケ崎歴史見てある記』一九七八年　文化資料館
山口金次「懐島山龍前院開基　山岡家に就いて」『郷土茅ヶ崎　上巻』八二頁一九七三年茅ケ崎市教育委員会刊
山口金次「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓碑一覧」『茅ヶ崎市史研究』創刊号六二頁一九七六年茅ヶ崎市刊
神崎彰利『ちがさきの村とお殿さま』二二頁・二八頁二〇一三年茅ヶ崎市刊
〈資料〉
『山岡家々譜』
『寛政重修諸家譜』千百四十五　第一七巻三六四～三七六頁　続群書類従完成会　一九八一年刊

私のふるさと 三

―新潟県刈羽郡高柳村大字栃ヶ原―

小川正恭

父母の田舎で過ごしたこと

私にはもう一つの「ふるさと」があります。その思いは「父と母にとっての田舎＝ふるさと」での経験の中にあり、時期的に次の様に三つに分けられるのです。

私の出生地は東京都中野区野方で、生まれは昭和十七年（一九四二）ですが、一つめのふるさとは、戦時中と戦後のしばらくの間、標題に掲げた新潟の祖父の家（現在は柏崎市高柳町栃ヶ原）に、母と一緒に疎開した思い出の中にあります。おそらく、昭和十九年の冬に行き、東京の中野に戻ったのは二十二年（一九四七）ころだと思います。私が小学校に入学したのが同二十三年四月だからです。この期間については、最晩年の母に聞いても不確かな記憶しか返ってきませんでした。ちなみに弟は、昭和二十一年に栃ヶ原で生まれたものの、野方小学校に入学しています。

栃ヶ原の集落には親戚が数多く暮らしていました。万延元年（一八六〇）生まれで昭和二十六年（一九五一）没の、長命だった曾祖母（祖父の母）もいました。いろりのそばの定位置に座っていたことを何とか思い出せますが、私自身が何をしていて、何を考えていたのかはほとんど覚えていません。このころの思い出は、両親や親族の誰かが語ってくれたことをもとに、私がつくったものなのでしょう。

二つめは、疎開を終えて中野に戻ってからの、毎年の夏のつらなりです。お盆になると、長男だった父は、私ら兄弟二人と（後には妹も伴って）、祖父方に数日間滞在しておりました。私が高校生になったころまで続けていたと思います。逆に、祖父が上京してきて我が家にしばらく居たこと、そして雪がほとんど降らない東京の冬を楽しんでいたこと、たまには夏に来たこともありました。そんなある時、祖父と一緒に近所の散歩に出かけました。中学に通う道の途中にある小さな橋（妙正寺川）を渡ってから、「お前の言っていた〈川〉とはこれのことだったのか、可哀想になあ」と言われてしまいました。栃ヶ原のムラの周囲に音を立てて流れ下る清冽な谷川の水や田んぼに比べれば当然の感想でした。少しだけゴミが沈んでいて、生活排水が浮かんでおり、ザリガニがたくさんいただけですが、戦後の経済的大復興として世の中が動き始めている景色でもあったのです。中学の校歌は「水清き妙正寺川～」と歌い始めます。その学校は統合されて無くなりました。このようなことが私の記憶に強く残っています。家族のメンバーとの強い結びつきが、ありありと体験的な感覚として浮かんでくるのです。

三つめは、小学校五年生の三学期（昭和二十八年）のことです。そのころ一人暮らしをしていた祖父が体調を崩したらしく、

母が子どもたちを連れて、三ヶ月ほど看病のために栃ヶ原に帰ったのです。お陰で、私は新潟の豪雪地帯の冬の暮らしを、子どもなりに満喫しながら過ごす貴重な体験をしました。「ふるさと」の小学校に一学期間だけ転校生として通った経験が、私の思い出に一層の厚みとして加わっています。昭和という時代の、それもかなり初期のころの生活が栃ヶ原に残っており、少しではありましたが触れることができたという思いもあります。一月十五日の夜に近所の子どもたちが、モグラ追いの行事をするので私をみんなで誘いに来てくれたことがありました。私は一緒に遊びたかったのですが、「風邪を引くのが心配で寝かせておく」と、母が断ってしまいました。いまでも、この小正月の行事に行ってみたかったと残念に思う気持ちが湧いてきます。この三ヶ月は短いようで長いふるさと生活でした。

この三つの体験からできた私のふるさと像には、村人との人間関係とか、親戚・家族という人間関係が、文化的な、また社会的な要素として大きく影響しているのはあきらかです。父と母の二人が栃ヶ原という集落で同じような生活を体験しながら育ったことが基盤になっています。母の実家は地元で本家といわれ、父の実家から、小学生の足で一〇分少々の距離にありました。母の姉が婿取りをして家を継いでおり、いとこが何人もいて、私はそこでよく遊んだものでした。ある夏に、母の実家に遊びに行く際に、手土産にスイカを持たされました。重かったためか途中で落として割ってしまいました。ベソをかきながら訪ねていったことがしばしば思い出されます。

「衣食住」という言葉がありますが、私にとっては、父と母をとおして「二人の田舎＝栃ヶ原」の生活からもたらされた思い出がその内容です。中野区野方で暮らす中で、ふるさと栃ヶ原の伝承が、再生され、展開されることがたくさんあったことを思い出すのです。

（二〇二一年四月十三日　記）

【編集者注記】筆者はここに掲載した「私のふるさと 三」で執筆終了と言っておられます。「その一」は本誌一四七号（二〇二一年一月一日発行）、「その二」は本誌一四八・一四九合併号（二〇二〇年九月一日発行）に掲載されています。

「私のふるさと」原稿は今後も募集します。

風　自由投稿欄

歌八首

今井文夫

元旦
床の間にお神酒供へて世の中の
　平穏祈る元日の朝

新春恒例の箱根駅伝に勇気をもらう
青春を箱根路にかけ力走す
　若者たちの姿頼もし

コロナに疲れる
庭の梅いつしか咲きぬ知らぬ間に
　コロナ自粛で巣ごもりの日々

春のかおり
ヒアシンス甘い香りのただよひて
　部屋いっぱいの春を吸い込む

次の四首は、コロナ発生前の旅の作です。

越前朝倉氏の居城跡を訪ねる
血に染めし一条谷川無念なる
　武者の涙か静かに流る

朝倉の栄華はあはれ館跡
　池の水面をかわずの泳ぐ

下田了仙寺にて
弥治川に柳ゆらめくペリーロード
　遠く聞こゆる楽隊の響き

ロープウェイで安達太良山へ
昨夜降る淡雪残る登山道
　踏みしめ仰ぐ安達太良の峰

新約聖書の「ブドウ園」と市内中島の「ブドウ園」

平野文明

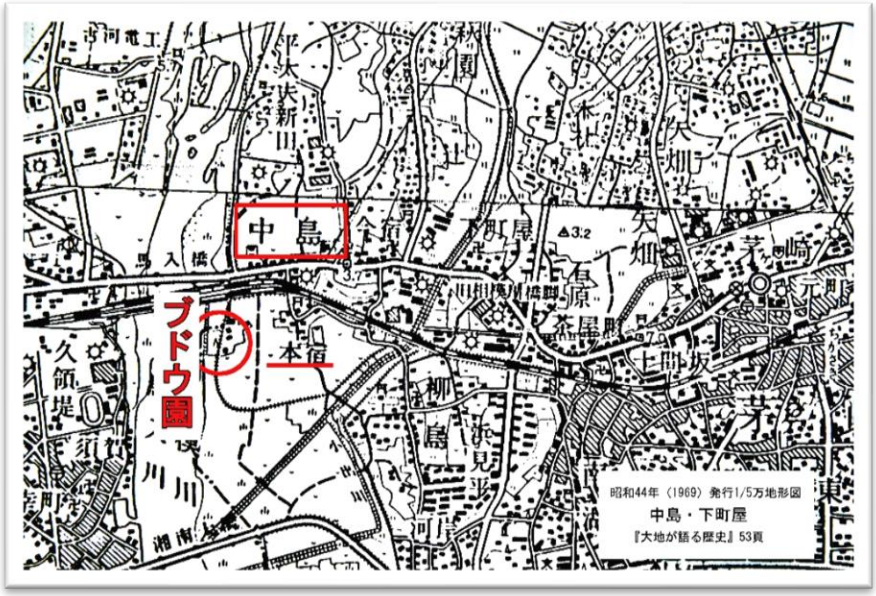
市内の中島に「ブドウ園」という名の一画がある。これは地名ではなく、中島に五つあるチョウナイ（町内。他の四チョウナイは本宿・二ツ谷・東・西チョウ）の中の一つの名である。

わが茅ヶ崎郷土会会員の羽切信夫さんは、昭和三十七年（一九六二）十一月にブドウ園の一画に転居してきた。当時一〇軒ほどの家があって、いずれも他から移ってきた人たちだったそうだから、ブドウ園の町内ができたのは古いことではない。羽切さんの住宅の道を挟んだ向かい側に、かつて内田という人が住んでいて、ブドウを育てていたのでこの名が付いたと聞いたそうである。しかし移住してきた時にはどこにもブドウの木はなかった。内田さんの屋敷跡には浅田さんという人が居て、土地の管理などをしていたと羽切さんは話すのである。

地図上のこのあたりに住宅が現れるのは昭和四十四年（一九六九）発行の五万分の一地形図（茅ヶ崎市史現代７『地図集　大地が語る歴史』五三頁）である。

「ブドウ園」という名は、地名としても集落名だったとしても他にあまりない名である。「内田さんがブドウ園を開いていたから」という話が、根拠をもって確認できれば別なのだが。羽切さんには悪いが、今の所、私には雲をつかむような話である。

ということから、「ブドウ園」の由来について、もう一つ、これも雲をつかむような別の話を、今度は私から展開してみようと思う。始めにくれぐれも申し上げておきますが、ここに述べることは何の根拠もない話なので、聞き置くだけのことにしておいて貰いたいのです。



先日、『聖書』（共同新訳　二〇〇〇年日本聖書協会版）を読んでいたら、「ブドウ園」が数カ所に出ていることに気づいた。中島のブドウ園が頭にあったので、「オッ　なんだ！」と座り直して読み直した。まだあるのかも知れないが、四話見つけた。

まず『「ブドウ園の労働者」のたとえ』（マタイによる福音書２０章１―１６　新約聖書３８頁）。あらすじを簡単に紹介しておこう。

ガリラヤを去ったイエスキリストは弟子たちとユダヤ地方に移られ、その地で次の様にいわれた。

天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人がブドウ園で働く労働者を、一デナリオンの労賃で、朝と午前九時と十二時と三時と午後五時にそれぞれ雇って畑に送った。夕方なって、主人は監督を呼び「最後に来た者から順に、皆に同じ労賃を払うように」といった。朝から働いていた者たちが、「暑い中を一日中働いたのに、最後に来た者と同じとは」と文句を付けた。そこで主人はいった。「私は不当なことはしていない。自分の分を受け取って帰りなさい。最後に来たものにも同じように支払ってやりたいのだ」と。

朝から働いた労働者も、午後五時から働いた者も同じ賃金とはないだろうと思ったが、聖書は、雇い主の支払いは妥当であるとし、しかもこのブドウ園を天の国（神の国）のたとえとしているのである。しかし、なぜそう解釈できるのかには触れていない。このたとえ話は新約聖書の中でも有名な部分で、たくさんの解説があるようだが、それは別の本に依らなければならない。とにかくここで私が言いたいのは、ブドウ園は神の国にたとえられていると言うことである。

マタイ伝のこの章の次もブドウ園のたとえ話である。『「ブドウ園と農夫」のたとえ』（マタイによる福音書２１章の３３―４６　新約聖書４２頁）

イエスキリストがエルサレムに着いたとき、町は、キリストを排斥する祭司長や律法学者や長老たちに治められていた。キリストは彼らと問答を交わしてその考え違いを指摘した上で、「もう一つのたとえ話しを聞きなさい」と次の様に話された。

主人がブドウ園をつくり、それを農夫たちに貸し、管理をまかせて旅に出た。収穫の時が近づいたとき主人は、収穫を受け取るために僕（しもべ）たちを農夫のところに送った。農夫たちは僕らを捕らえ、袋だたきにし、殺した。次により多くの僕が送られたが同じ目に遭った。そこで「私の息子なら農夫たちは敬うだろう」と送ったが、「これは跡取りだ。殺して相続の財産を取ってしまおう」と、ブドウ園の外に放り出して殺した。さて、ブドウ園の主人が帰ってきたらこの農夫たちをどうするだろうか。

祭司長たちは答えた。「その悪人どもを殺し、ブドウ園を、収穫を納めるほかの農夫たちに貸すだろう」と。そうするとキリストはいわれた。「神の国はあなたたちから取り上げられ、ふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。」と。祭司長たちはこのたとえを聞いて、イエスは自分たちのことをいっておられると気づいた。

この話では、ブドウ園はエルサレム（神の国）に、ブドウ園の主人は神（キリスト教の創造神）に、僕（しもべ）たちは予言者たちに、跡取りの息子はイエスキリストに、そして農夫たちは祭司長たちにたとえられている。エルサレムが、使わされた予言者及びキリストを殺した祭司長たちから取り上げられて、神の国を信じる民族に与えられる話だと解釈されている。（例えば、佐藤陽二『イエスのたとえ話講話解　マルコ』一九四頁―一九八二年聖文舎　及びウィキペディア「ブドウ園と農夫のたとえ」）

これと同じような話は新約聖書の「マルコによる福音書」（１２章の１―１２　同書８５頁）と「ルカによる福音書」（２０章の９―１９　同書１４９頁）にも載っている。

中島のチョウナイの一つになっている「ブドウ園」の名は、新約聖書にある「ブドウ園のたとえ話」に基づいて付けられていると考えたらどうなるだろうか。

まず、中島のこの一画をそのように名づけた人がいなければならない。その人は、この地に最初に越してきた人だろう。そして、その人はキリスト教を信じていた人だったろう。自分が住むこの地がやがて神の国になるよう期待して、新約聖書にある「ブドウ園のたとえ話」から自分の住むこの一画を「ブドウ園」と呼ぶことにした。

ウーム。できすぎた話ができた。そんな人が居たか居なかったが、何も伝わってはいない。だから私はこの話を、雲をつかむような話といっておいたのです。（二〇二一年三月二十一日　記）

茅ヶ崎文化人クラブ残念ながら休会

羽切信夫

私は昭和四十九年（一九七四）四月に「茅ヶ崎文化人クラブ」に入会しました。その動機は、国労東京駅分会の先輩である小川伊之助神奈川県会議員から「君も茅ヶ崎市議会の文教厚生常任委員になったから茅ヶ崎の文化についてもっと勉強しなさい。それには文化人クラブに入って活動し、勉強しなさい」と強く進められたからです。

文化人クラブの会議や歴史散歩などに熱心に参加したことが認められて、昭和五十七年（一九八二）四月から理事に推薦されました。私の担当する主な業務は、茅ヶ崎市役所および茅ヶ崎市教育委員会と文化人クラブの連絡でした。

茅ヶ崎文化人クラブは昭和三十四年（一九五九）十二月に、「茅ヶ崎ペンクラブ」が「茅ヶ崎文化人クラブ」に改組したものです。初代会長に牧野英一氏（刑法学者・文化勲章受章・茅ヶ崎市名誉市民）、幹事に斎藤昌三氏（市図書館長）、高木惣吉氏（海軍少将）、守安 正氏、野村 宣氏（朝日新聞記者・茅ヶ崎市長）、松原宏遠氏、木村 昇氏、川添隆行氏（時事通信記者）、山﨑芳園氏、金子昌夫氏が就任しています。会員には山口金次氏（郷土史家）、三木花子氏、広瀬正治氏、武田勝蔵氏、熊沢亥三氏、柾木一策氏（茅ヶ崎市長）、岡本花子氏（茅ヶ崎市会議員）などの名前が見えます。昭和三十七年（一九六二）に名簿作成。会員数は三六〇人でした。

昭和四十五年（一九七〇）四月、牧野会長が逝去されました。顧問だった槇 有恒氏、小山敬三氏（画家・茅ヶ崎名誉市民）、茅誠司氏（大学教授）の三氏が交互に会長を務めています。川添隆行氏（代表幹事）が事務を担当していましたが、昭和五十七年（一九八二）三月の総会で会長に就任しました。

毎月の例会や会報『茅ヶ崎文化の姿』を発行していました。主筆兼発行者だった川添会長が平成七年（一九九五）八月九日に死去され、第一五四号で刊行できなくなり休刊が続きました。宮川一男氏が会長に就任した平成十八年（二〇〇六）に復刊し、第一七号まで発行しましたが、再び休刊になりました。復刊第一号の寄稿者は、宮川一男会長の「会報『茅ヶ崎文化の姿』復刊のことば」、森 潔副会長の「十八年度　文化人クラブの事業概況と役員名簿」、「十八年度　文団協の事業概況と役員名簿」、小池富夫副

会長の「文化人クラブの創立とその活動」、名和稔雄事務局長の「文化人クラブの活動」、「歴史散歩一五〇回記念紀行」、中村 栄理事の「座右の書」、木村朝子氏の「四月歴史散歩　飯山観音に」、森久保 卓理事の「岡崎 周さんを偲んで」、川井盛次理事の「八木重吉の詩魂」、中島幸子会員の「星からのメッセージ」などがあり、編集委員は森 潔、川井森次、森久保 卓、中村 栄、中島幸子の五氏で、編集責任者は森 潔氏が務めました。

この平成十八年度の役員名簿には、宮川会長のほか二一名が載っていますが、今、生存しているのは私（羽切信夫）を含む数人に過ぎません。

創立五十周年を記念して平成二十一年（二〇〇九）十二月に『文化人クラブの五十年』を発行しました。当時の三役は次のとおりですが、全員が亡くなられています。私も理事の末席に名前があります。

会長　宮川一男氏、副会長　小池富夫氏、森 潔氏、
事務局長　名和稔雄氏

茅ヶ崎文化人クラブは六十年の歴史があります。しかし会員の高齢化と病気などによる退会者が続出し、平成二十九年（二〇一七）十二月現在の会員は九人となりました。会員総会を数回にわたって開催し、会の運営について熱心に議論を行いました。しかし、平成三十年（二〇一八）以降の活動を休止するとの結論となりました。

また、茅ヶ崎市文化団体協議会が設立されるときは、設立のための中心を務めた団体でもありました。にもかかわらず、平成の末期には会の活動を停止する状況だったので、平成二十九年十二月十三日の日付で、会の代表　名和稔雄名の文書をもって休会の届を文化団体協議会に提出しました。その後、名和さんを中心にして数人で、二ヶ月に一回くらいの懇談会を行いました。平成三十年（二〇一八）八月八日に名和さんが急逝されてからは懇談会も開くことができずに残念ながら今日に至っているのです。

会員数の変化

昭和三十七年（一九六二）四月　三六〇人
平成二十八年（二〇一六）三月　二二人
同　二十九年　三月　一五人
同　三十年　三月　九人

過去に実施した事業

○国木田独歩追憶碑建立　牧野英一氏を中心に実行委員会を作り建設した。昭和三十五年（一九六〇）六月二十六日に除幕式を行った。

○国木田独歩　没後百年記念講演会　平成二十年（二〇〇八）六月二十二日。演題「国木田独歩と茅ヶ崎」　講師　井上謙先生（近畿大学教授）

○国木田独歩　没後百年記念誌『国木田独歩と茅ヶ崎』発行

○茅ヶ崎ゆかりの著作展　毎年行われている茅ヶ崎市民文化祭の一環として展示していた。展示物の一部は、国木田独歩、斎藤昌三、平塚雷鳥、小池夢坊、八木重吉、佐川光晴などの著作。

○茅ヶ崎在住者の著作などの目録作成。平成三十年（二〇一八）まで作成していた。

（二〇二一年四月　記）

茅ヶ崎郷土会報告

綿引 進さんのご逝去を悼む

（その一）

杉山 全

綿引 進さんが令和二年（二〇二〇）十一月二十日に享年八〇歳で逝去されました。

私が入会した時、すでに理事としてご活躍されていて、郷土会の活動内容の懇切丁寧なご指導を頂きました。綿引さんが体調を悪くされ理事を退任されるまでの数年間、史跡めぐりや茅ケ崎カルタ作りなど、一緒に汗を流したことが思い出されます。

綿引さんは、大岡越前祭、茅ケ崎市文化祭、その他催し物で茅ヶ崎郷土会が行う展示会などでは、佐藤 正さんと精力的に関わっておられました。また、史跡めぐりにも熱心に参加されておられました。さらに総務的な仕事にも積極的に取り組まれ、総会や史跡めぐりの報告などを会報に寄稿されています。身近な話題などは、体調を崩された後も会報に幾度も投稿されました。

私たちはまた一人、情熱溢れる同志を失いました。綿引さんの遠くへの旅立ちを心よりお悔やみいたします。

（その二）

羽切信夫

昨年の十二月、平野会長から突然電話があり、理事を務めかつ茅ヶ崎郷土会の機関誌（会報『郷土ちがさき』）の編集委員などを歴任された綿引 進さんが亡くなられたとの連絡を受けました。

綿引さんは、理事（史跡めぐり担当）と会報の編集委員として平成十八（二〇〇六）年から同二十六（二〇一四）年までの八年間活躍されました。病気がちになられてから理事は辞退され、平成二十九（二〇〇七）年まで協力員として会報配布や会費の徴収などを活動されておられました。私より一回りくらい若いので惜しまれます。

私は、会報の編集責任者を、前任者の曽禰正夫さんから引継いて一〇三号（平成十七年五月二十日発行）から一一八号（平成二十二年五月一日）までの一六号を担当し、一一九号（同年九月一日）からは故名和稔雄さんにお願いしました。編集を辞退したのは、私事ながら、国労退職者組合・東京地方連合会々長を務めることになったためでした。

綿引さんに初めてお会いしたのは、会報一〇七号（平成十八年九月一日）に、「蒲生氏郷公の五輪塔を訪ねて」という、福島県会津若松市に赴任した御長男の自宅を訪問されたときの見聞記を

いただいたときでした。それから綿引さんは、一三九号（平成二十九（二〇一七）年五月一日）までの十一年間にわたり、「文化祭『茅ヶ崎の道展』を終えて」、「第二一八回史跡めぐり」、「茅ヶ崎の八大龍王勇の墓を訪ねて」、「第二二八回史跡めぐり」、「近藤について」、「国府祭のあれこれ」、「私と会津若松」、などの原稿を会報に掲載されました。そして最後の執筆は一三九号（平成二十九年五月一日）の「鳥居について」でした。

茅ヶ崎郷土会のための、長い間のご活動とご協力に対し心から感謝いたします。これからも天国から郷土会と私たちの活動を見守っていてください。

（二〇二一年四月　記）

【茅ヶ崎市文化団体協議会創立六十周年記念表彰の受賞】

二〇二〇年度は文団協の創立六十周年記念の表彰があったので、当会では、三十年以上文団協の発展に尽力の部に尾坂郭子、羽切信夫両氏を、十年以上所属部会の活動を支えその発展に寄与した人の部に青木昭三、片田明男、杉山 全、西 輝幸、原 俊一、誉田雅彦、前田照勝の諸氏を推薦し、それぞれの方は、前者は感謝状を、後者は表彰状を受けられました。

【これからの行事予定】

7月から再開ですがコロナ禍対策のために**会員限定**とします。さらに感染拡大等の場合は中止及び延期もあり得ます。**変更は郷土会のホームページに掲載**します。会場がまだ未定の場合は（予定）としています。**9月からの行事は会報の次号**に掲載します。

○郷土歴史民俗勉強会（Ｓｔｕｄｙ ｒｏｏｍ）

（予定）７月２０日（火）１３時から　於うみかぜテラス

名取龍彦会員「第２回　純水館の話」

（予定）８月１７日（火）１３時から　於うみかぜテラス

平野文明会員「市内 下寺尾の歴史を訪ねる　事前勉強会」

○市内23ヶ村調査勉強会は５月からうみかぜテラスを会場に始めます。

【150号正誤表】

５頁下段３行　論文２は「論文１が完成した後に入手した資料とその考察」と記されている。（「 」で囲む）

６頁上段３行　成蹊学園小松松次郎→小瀬松次郎

６頁下段６行　社会教育活動及ぼし　↓　社会教育活動に及ぼし

６頁下段１４・１５行　あったた。　↓　「た」トル

８頁上段６行　捕らえ　↓　捉え

１１頁下段２５行　小諸市諸　↓　小諸市諸（もろ）

１９頁上段本文９行　集合者したのが　↓　集合したのが

【編集後記】

初投稿お二人の２編を巻頭に掲載しました。資料性豊富です。小川会員の「ふるさと」は最終回です。３回の連載を通して、時代の変化、家族への思いを交えたいい文章でした。また、お亡くなりになった会員への追悼文も掲載しました。世の逃れられない常とはいえ、元気で活動に参加されていた姿を目にしている者にはさみしい限りです。

ＨＰ版はネット上で「茅ヶ崎郷土会」と検索すると見ることができます。ＵＲＬは http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/。

本誌に対するご意見ご感想を待っております。どうぞ編集担当の平野（０９０―８１７３―８８４５）まで。